



文献紹介

Scarre, 'Alkaline Hydrolysis and Respect for the Dead'

概要

本論文は、哲学者である著者が、近年登場しアメリカやカナダで普及しつつある「アルカリ加水分解葬」について倫理的な観点から論じるものです。この葬法は、遺体を高温高圧のタンクに入れて溶解させるもので、主に環境負荷の小ささから支持を得つつありますが、その一方で、死者や遺体を尊重していないとして激しい倫理的な批判を集めてもいます。このような背景のもと著者は、既存の批判を整理したうえでそれぞれに応答し、アルカリ加水分解葬は決して死者の尊厳に反するものではなく、倫理的に問題のない葬法だとして擁護しています。

キーワード：アルカリ加水分解葬、死者の尊重、遺体の尊厳

Geoffrey Scarre, 'Alkaline Hydrolysis and Respect for the Dead: An Ethical Critique', *Mortality*, 30.1 (2025), pp. 273–86.

アルカリ加水分解葬の登場

近年、アメリカを中心として、アルカリ加水分解葬（Alkaline Hydrolysis）が火葬や土葬に代わる遺体処理の方法として支持を集め始めています。「水葬」、「水火葬」、「無炎火葬」などと呼ばれるこの葬法は、遺体をステンレス製のタンクに入れ、水とアルカリ溶液の混合液に浸し、高温高圧下で溶解させるというものです。最終的に遺体は骨の残留物と液体廃棄物に分解されますが、遺骨は遺族に返還され、液体廃棄物は処理されたうえで下水に流されることが多いとされます。

アルカリ加水分解葬は土葬のように広大な土地を必要とせず、また火葬のようにエネルギーを消費し二酸化炭素を排出することもないため、環境負荷が極めて低く、この点が最大のメリットとされます。また、遺体の処理にかかる

費用も比較的安価です。このため、土葬と火葬に次ぐ「第三の葬法」としてこれからいっそう定着していくことが予想されています。

その一方で、カトリック教会の一部に代表される保守層は、アルカリ加水分解葬は遺体の尊厳に反し、死者を尊重していない葬法だとして倫理的批判を行ってきました。これに対して著者は、アルカリ加水分解葬は死者の尊厳を損なうものではなく、反発のほとんどは誤解や偏見に基づいていると反論します。

死者と遺体の尊重

アルカリ加水分解葬に対する倫理的な批判の多くは、タンクの中での溶解のプロセスではなく、その結果残る液体廃棄物の処理について向けられています。つまり、かつて人間であった液体を下水に流すことなどあってはならないというのです。しかし著者は、下水に流されるのはあ

くまで人間性の痕跡が一切ない単なる化学物質の溶液であって、人体の組織や臓器が流されるわけではないと指摘しています。

加えて著者は、カトリックの生命倫理学者ラスノスキの見解を引きながら、火葬において遺体を煙として大気中に放出することと、アルカリ加水分解葬において遺体を液体として下水に流すことの間には本質的な差異はないと主張します。もし私たちがアルカリ加水分解葬にだけ倫理的な嫌悪感を持つとすれば、それは火葬と比べてこの葬法が新奇なものであるために、まだ慣れていないというだけなのかもしれません。

私たちは遺体に敬意を払いますが、著者によれば、それは遺体が故人の人格と結びついているからであって、物質としての遺体を持っている特性のゆえではありません。世界には多種多様な葬法がありますが、著者は、そのどれもがそれぞれの仕方で死者に敬意を払っているのであって、特定の方法が客観的に正しかったり間違っていたりするわけではないと主張します。

重要なのは、故人の信念や希望、遺された人の感情を尊重することであって、故人が環境への配慮を理由にアルカリ加水分解葬を希望していたのであれば、その意思を尊重して希望通りの葬法で故人を送ることが死者を最大限尊重する方法だと著者は論じています。よって、アルカリ加水分解葬は、故人の意思に沿う限りにおいて、倫理的に何ら問題はないとされます。

アルカリ加水分解葬は「最善」ではない？

アルカリ加水分解葬が本質的に悪いものではないとしても、土葬や火葬と比べると死者への敬意の点で劣っており、最善の葬法ではない、という批判があるかもしれません。著者はこのような議論を三つ取りあげ、すべて根拠がないとして退けています。

第一に、アルカリ加水分解葬は「不自然」だという批判です。しかし著者は、かつての西洋においては火葬も不自然で野蛮だと批判されていたように「自然」と「不自然」の境界線は曖昧であり、特定の葬法を倫理的に問題視する根拠にはならないと論じます。火葬もアルカリ加水分解葬も、人間が自然と関わりながら目的を達成しようとする技術であるという点で何ら変わりはありません。

第二に、アルカリ加水分解葬は無機質で「工業的」なプロセスであり遺体の処理方法として適切ではない、という批判です。これに対して著者は、現代の火葬場も同じように工業的であると反論します。さらに、現代の病院で行われる最先端医療もきわめて技術的で工業的ですが、それが人命軽視だと批判されることはありません。よって、アルカリ加水分解葬が現代の医療や火葬と比べて特別工業的で問題だとは言えないと著者は主張します。

第三に、アルカリ加水分解はもともと家畜の死骸処理や肥料生産のために開発された技術であり、そのようなゴミ処理の方法を遺体に用いるべきではない、という批判です。この批判に対して著者は、愛する家族が廃棄物や肥料として扱われることに嫌悪感を抱くこと自体は心情的に無理のないことだと認めます。しかし、アルカリ加水分解葬の結果生成される液体にはDNAやRNAは残っておらず、もはや人間とはみなされないため、それが廃棄物として下水に流されることや再利用されることに過度な罪悪感を抱く必要はないと主張します。

遺体を単なる資源やゴミとしてのみ扱う態度は間違いなく倫理的に問題ですが、儀礼や追悼を行い、死者への敬意を尽くしたうえで、物理的な残余物としての遺体を環境負荷の少ない方法で処理することは倫理的に問題ではないというのが著者の結論です。

コメント

近年では従来の慣習とは異なる新たな葬法や遺体処理の方法が数多く登場し始めています。本論文で取りあげられているアルカリ加水分解葬もその一つで、アメリカ等の国では既に実践されていますが、嫌悪感を抱く人も少なくないのではないのでしょうか。しかし、つきつめて考え

てみると、アルカリ加水分解葬が火葬や土葬といった従来の葬法と明確に異なる点を指摘するのは簡単ではありません。著者の言うように、わたしたちがアルカリ加水分解葬に抱く反感は単なる偏見に過ぎないのでしょうか。このような嫌悪感や不快感をどう扱うべきかは、葬送の倫理について考える際の重要な論点です。

鈴木英仁

京都大学大学院文学研究科・研究員

SMBC京大スタジオ「誰もが生・死後の尊厳を保つための持続可能な身じまい・意思決定とその支援」プロジェクト（幸せなしまい方PJ）ではさまざまな領域の意思決定を対象として文献調査を進めています。詳細は[プロジェクトのウェブサイト](#)と[調査報告アーカイブ](#)をご覧ください。

ご意見・ご感想はinfo@ethics.bun.kyoto-u.ac.jpまでお願いいたします。